

下平尾 勲著『地元学のすすめ』 (新評論 2006年)

清水 修 二

「地元学」なるものの定義は本書においても必ずしも明確でないが、それはまちづくりの人間学であり、地域資源を発見し連携させる創造的な産業政策を地域で構築するための、一種の方法論だと言っていいだろう。著者は、豊富な学問的蓄積と実践の経験にもとづいて今日の、とくに地方都市と中山間地のまちづくり戦略を熱っぽく説いている。全編を貫いているのは市場原理主義批判で、不況下において画一的な競争主義を外から押しつけた結果がどんな悲惨な事態を地域にもたらしているか、またそれはいかなるメカニズムにおいて招来された事態であるかを明解に分析している。

たとえば海外生産と開発輸入拡大の影響について著者は、それが仏壇仏具や墓石、欄間、そうめん、畳表といった日本人しか消費しない商品にまでおよび、またわが国で長年にわたり努力して育てられてきたすぐれた種子の海外への流出をもたらしていることを指摘する。そうしたことが日本の歴史と文化の破壊につながっていることに対しては「道義的な規制」を加えることが必要だと主張している。

著者はよく知られた地場産業研究の第一人者であるので、本書でも随所に伝統産業の現場に立ち入った所論の展開がある。漆器を例にとれば、中国で生産した安い製品を輸入して「再加工」し、付加価値をつけて高級品として販売するといったことをすると、一連の漆器生産において前工程をなす下地業、成型業、木地業では仕事がなくなってしまい、産地は一挙に衰退してしまうのである。

産業集積の重要性が強調されているのも本書の特長の1つだろう。産業の集積地は、生産・運搬コストを節約する集積利益の源泉であるばかりではない。歴史的に形成された集積地の醸し出す「伝統と風土と雰囲気」の果たす役割も大きいと著者は言う。そうした環境が、そこで幼少年時代を過ごす人間の中に知らず知らずのうちに独特の企業家精神を育む。そうしてそこには、技術的専門家ばかりでなく経営管理やマーケティングの専門家も自ずから生まれる。「社会的分業に基

づいて集積地が形成されるのではなく、集積地が形成されることによって社会的分業が促進されるのである。」それだけに、産業集積を解体するような競争原理の導入は、地域産業の発展を甚だしく阻害する。そしてそれはやがて、地域づくりの担い手の喪失という事態に帰着するのである。

地域産業の発展における商人の役割についての記述は、本書でもっとも面白い部分だろう。多様で分散している消費者ニーズを一定規模にとりまとめ、これまた小規模で分散している生産者の生産物と連結するのが商人の基本的な役割で、起業家が生き延びてこれらのも、産業集積地で商人が社会的分業の一翼を担ってきたからである。ところが経済のグローバル化の進展は、生産のカナメに位置する産地問屋に大打撃を加えてしまった。また消費地問屋の倒産も相次ぎ、それが地場産業の不振の要因になっている。

商人のあり方がもっと直接的に問われるのは、市街地における商店街の衰退問題である。「商人は仕事の流れの中において自分の判断で自由時間を作ることができる。いわば、商人は経済活動の原則に基づいて自由に発想し、行動できる自由人である」と著者は書いている。自由人であるかれらは、ただ利益を上げるだけでなく、企画力や組織力等のさまざまな才覚を発揮して地域社会に貢献してきた。市街地中心部のまちづくりで中核を担ってきたのは、そういった能力と活力をもった商人たちだった。ところがいま、規制緩和による流通業界の激変の渦中で、老舗と言われる多くの商店が倒産の危機にさらされている。

大型店の郊外立地を規制する趣旨で作られた福島県の「商業まちづくり推進条例」に対し、ある大手流通資本は「需給調整であり、憲法違反の疑いがある」と抗議していた。しかし本書の著者は逆に、大型店の立地規制に関する「まちづくり三法」は「需給調整に踏み込んでいないこと」においてこそ根本的な限界があると明快に指摘している。

地域経営のポイントは、商品・サービス取引の収支

だけでなく資金上の収支も含めて地域収支を黒字にすることである。「重商主義的な手法であるが、地域資源に付加価値をつけて売り出すと同時に収入を地域内で循環させる」必要がある。ところが、大規模小売店は地元の経済循環に溶け込むことはない。「地元銀行に入金したあとの数日後には大都市の銀行に送金している。」また「支店長、総務課長や営業課長などの管理職は本社から派遣されてくるために地域においてリーダーが育ちにくい。」しかもそうした大型店は、地元の歴史や文化などにはそもそも無関心である。

かくて、単純な市場競争原理による消費者利益の擁護の論理は、結局は消費者自身の不利益につながるような市街地におけるコミュニティの衰退をもたらす恐れが大きいのである。

中心市街地問題は、いわば地域の歴史の厚みを背負った「商人魂」の復活によらなければ打開できないだろうと私も感じている。商人自身が、地域コミュニティの形成と発展において商人が歴史的に果たしてきた役割に誇りと自信をもつことができれば、中心商店街ももっと元気になるのではないか。そうなれば、消費者である住民が目先の経済的利害にとらわれ、地域の歴史と文化の集積をみすみす衰退するに任せているという目下の状況を転換して、消費者が「生活者」の自覚をもって地元の商業集積を支えるようになる日も、いつかきっと来るに違いない。

さて中山間地の地域づくりについても本書はかなりのページをさいている。中山間地では「人口流出阻止のための堰づくり」が必要になっている。そのためには何よりも雇用の創出が課題になるが、実際には財政危機の下で農村の重要産業である公共事業は激減しており、失業問題が深刻になっている。財政の逼迫を免れるために公共事業を縮小しても、その結果として失業がふえれば、今度は失業保険などの社会保障給付をふやさなければならない。

農村部のまちづくりの事例は少なくない。本書でも福島市内の温泉地や高知県馬路村の事例が紹介され、グリーンツーリズムの成功の秘訣も説かれている。また農村の地域おこしの歴史的発展段階を整理しながら、今日では先端技術、高度情報システムの導入によるベンチャー企業の育成も課題になっていることが指摘されている。

過疎農村地域のまちづくりについては、私自身もいま福島県南会津町で事業に取り組んでいるが、地方交付税が大幅に削減される現状の下で、条件はきわめてきびしい。団塊世代の大量退職を好機とみて人口の誘

致合戦が展開されているものの、仮にかれらの流入が実現したとしても、世代継承による人口の定着を図るのは山間の過疎地では至難の業だ。著者は、中山間地においては行政機関＝自治体こそが「大企業」であり、行政が「民」として活躍するのであれば「官から民へ」も机上の空論だと言っている。

本書で詳しく紹介されている福島県の「国分農場を中心とする環境リサイクルシステム」は興味深い事例である。温泉地の旅館街などから排出される食品廃棄物を、地元の酒造会社の提供する酵母を使って肉牛の優良な飼料にし「酵母牛」としてブランド化する。また同じ農場でくだんの生ゴミを発酵させて堆肥を作り、これを利用して地元の農業者が有機野菜を作って温泉旅館に回帰させる、といったリサイクルである。実際はもっと複雑だが、中小事業者同士が横の連携をとればこうした知恵も湧いてくるということである。

著者は、日本人には競争よりも協調のほうが性に合っていると。「個人戦より団体戦を得意とするものであり、協調性という日本の特性に合ったやり方が国際競争力の源泉である」と。そして市場原理主義は人間と人間の絆を断ちきってしまい、日本経済を底辺で支えている産業の競争力までも奪ってしまうと警告しているわけで、新自由主義的な国際競争力強化策が小気味よく批判されている。

本書には「地域再生の王道は足元にあり」というサブタイトルがついている。「足元を掘れ、そこに泉が湧く」という言葉もかつてよく口にされたものである。「地元学」とはいかにも泥臭い語感の言葉だが、意味するものは「地域の学問」の基本的な立脚点だろう。本書の魅力も、まさに現場主義的なその泥臭さにあると思う。それは著者が長年携わってきた地場産業研究から自然に滲み出てくる雰囲気であり、綿密な調査に裏付けられた現実認識がそこに横たわっている。また、ちょっと逆説的ではあるが、具体的な事象をきわめて原理論的な記述で説明している部分もあって、それも本書の魅力の1つをなしている。

ここで描かれている現実是非常に深刻だが、本書の醸す雰囲気そのものは決して暗いわけではない。最終章にある「産学・地域連携」の例として紹介されている「ふくしまふれあいカレッジ」は、著者自身が現在学長をつとめているものだが、大がかりな社会人教育の実践例として全国的に注目されていい。福島中央競馬場の巨大スクリーンを使って千人を相手に講義を行うといった、気宇壮大な社会人教育がこれからどう発展していくか、たいへん楽しみである。(2006.7)